第 17 号
発　行
筑波山がまの油売り口上研究会

特別寄稿　つくば市在住の郷土史研究家の井坂氏より関東の名山筑波山について、玉稿をお寄せいただきました。

ランドマークとしての筑波山

井坂　敦実

筑波山は関東平野のどこからでも遠望できる。西の高崎の人も見えるといい、銚子の人も犬吠崎から見えるという。江戸っ子が「東に筑波　西に富士」と言ったのも、ランドマークとしての筑波山に寄せる愛着があるがためだろう。

県内では大半の小中学校・高等学校の校歌に筑波山が歌われている。驚いたのは東京の麻布高等学校の卒業生から、わが校の校歌にもと告げられたときだった。調査をすれば県外の遠隔地の校歌に登場する例が多々あるのかもしれない。

そうした筑波山に寄せる人々の思いは、江戸時代に出版された各種の名所図会を見ると、更に一層その愛着の程がうかがわれる。「日本名山図会」「利根川図志」「江戸名所図会」「木曽名所図会」など、様々な名所図会の挿絵に登場している。中でも圧巻は歌川広重の「名所江戸百景」である。百景百十八図のうち、さすが富士山は十九図に描かれている。筑波山は十図である。しかし富士山が円錐截頭（せつとう）形のマンネリ化した図柄であるのに対して、筑波山の山容は一図一図みなニュアンスを変えているのが面白い。

関東平野の縁辺部には高い山々が連なる。箱根・丹沢・武甲・赤城・日光・那須等々である。だが昔々の人の知識では、それらの山をはっきりと識別できなかったのだと思う。富士山は一目でそれとわかる。また筑波山は低い山ながら、確かにそれと認められたのだと思う。

二つの峰を有する山容は独特なものがある。しかも周囲に肩を並べるような山はなく、平野に独立している。誰もがあれは筑波山だと認める筈である。ランドマークとしての筑波山の位置づけは、昔の人には確固不動のものであったに違いない。

地図も磁石もない時代、旅する人々が頼りとするのは山より外になかった。そんな時代に旅する人々の心細い思いを、筑波山はどんなに支え励ましてくれたことか。筑波山は有難い山であった。

そして、本当はこの方が肝心なことなのだが、尊い神のいます山として筑波山が古くからあがめられてきたことが、この山をして、なおさら注目させたであろう。「常陸国風土記」には、関東地方の各地から人々が筑波山に参ったことが記されている。

そしてまた、本紙の読者のために一言触れておくならば、私はがまの油の口上は京都が発祥の地だと想定している。そこでは「これより北伊吹山の麓のオンバコ草を…」と述べられていたと思う。その口上が江戸に移って、伊吹山が筑波山に変わったのだろう。伊吹山は近江の名山である。多くの薬草を産し、また修験の山としても知られる。伊吹山がそうであるように筑波山もまた神秘の山であった。神聖な山の霊気をうけた薬草を食らうがゆえに、がまの油の効能が更に増すと考えられたのである。

歌川広重　江戸百景より
「隅田川　水神の森真崎」

歴史探索

清水　泰清

甲斐武田家発祥の地が、ひたちなか市武田だったこと、ご存知でした?

皆様ご存知の戦国武将武田信玄。彼は茨城県ひたちなか市の出だったこと、ご存知でした？

私も正確に知ったのはつい最近でした。今年の1月「《勝田マラソン》のアトラクションに《武者行列》を入れるから武将役で出演して下さい」とボランテア登録している隣町ひたちなか市の観光課から連絡がありました。くわしく聞くと、全国規模になった「勝田マラソンを盛り上げるため、いつものお母さん達の「ヨサコイソーラン」に加えて武田信玄発祥の地をＰＲしたい。ついては武田の武者行列を組むので足軽役は足りるからメタボ気味のオジサン達には武将役を引き受けて欲しい由。役に合いそうなのでOKしました。

武田信玄との関係をこの際しっかりさせておかねばと、ひたちなか市武田の通称武田神社に調べに行きました。

正式名称は湫尾(めまお)神社。ご祭神はすさのおの尊(みこと)の弟君、すさのうの尊。武田郷の鎮守として武田大明神と尊称されており、元禄年間水戸藩主徳川光圀が神鏡を納めたと伝えられています。隣に「武田氏館」があったので見学しました。ここは昔の絵巻物や中世の武士の館などを参考にして再現した建物で、武田氏に関する遺跡、資料などが展示されていました。

後三年の役(一〇八三～一〇八七)に際し八幡太郎義家の弟、新羅三郎義光が常陸の介(すけ)に任じられ、在地勢力と提携しつつ、長男義業(よしなり)を久慈郡佐竹郷(常陸太田市)へ、三男義清を吉田郡武田郷(ひたちなか市武田)に配した。義清は刑部三郎と称し、武田郷の地名から武田氏を名乗り武田冠者と呼ばれた。

「武田系図」によると　大治5年(一一三〇年)勢力拡張にあせる義清、清光父子に行き過ぎがあり「清光濫行」として告発され、甲斐の市河荘に配流となった。

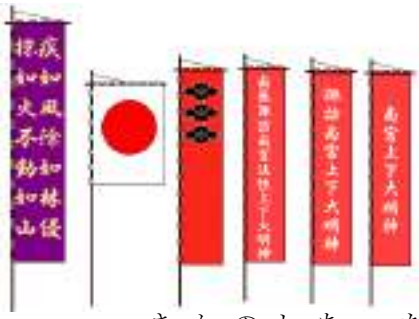
父子は清和源氏と密接な関係にあった甲斐の地で源氏発展の基礎を築き、新規に田畑を開発し甲斐の守に任じられる。名将武田信玄はこれより十八代目にあたる。

私見ですが、同じ清和源氏から分かれた佐竹氏は、ライバル武田が甲府に流されたチャンスにどう動いたのか、この時期に大いに動き勢力を伸ばしたはずです。この事はぜひ調べてみるつもりです。

時は流れて四四〇年　元亀三年(一五七二年)戦国最強の軍団と謳われた武田騎馬軍により三方ケ原で完膚なきまでに打ちのめされた徳川家康は、辛うじて浜松城へ逃げ帰る。しかし、その武田軍団も天正三年(一五七五年)信長鉄砲隊により長篠の戦で完敗。信玄の跡を継いだ勝頼が天目山で自刃崩壊する。武田武士の強さを身をもって知った家康は、主を失ったこの軍団の主だった武将を積極的に自軍に迎えるのである。彼らは直ちに関ケ原で活躍する。さらに家康の五男信吉(のぶよし)の母が武田家ゆかりの女性だったこともあり、二〇歳で水戸の城主を命ぜられると、武田の家臣たちは、彼に付き添って水戸に赴き忠勤を励むのである。信吉は翌年病死。代りに家康の末子、頼房がそこに座ると、信吉に付き添ってきた武田の家臣たちは残り、水戸藩を支えた。徳川御三家水戸藩は実質、武田家臣団が作ったとも言えるのである。

ここからまた私見です。徳川が水戸から秋田に佐竹一族を追い払った時、百姓から町民その他　佐竹の温政を懐かしむ民が多く、藩運営は難渋を極めたそうです。そこへ交代に入った藩士が武田武士とは何という巡り合わせでしょうか。彼らは四四〇年前の逆の立場に立たされたのです。

同じ清和源氏の別れながら最大のライバル佐竹の風を一掃して、新しい徳川の風を入れるべく旧武田武士は奮闘したはずです。



怪しげな徳川源氏説があります。しかし由緒正しい佐竹、武田この名族の徳川初期の葛藤をこれからいろいろと調べて行きたいと思います。

現在小町塾で研修を重ね、年度内デビューを目指して頑張っておられる、**秋山由美子さん**からご投稿いただきました。

今回がまとは直接関係無いのですが埼玉県ふじみ野市内にある、『ＮＰＯ法人　聴導犬普及協会』見学の機会がありましたので、勝手ながら、その一部内容のお知らせまで。

盲導犬は、目の不自由な人を安全に誘導するのが仕事で、ハーネスというハンドルを付けているのが特徴。介助犬は、体の不自由な人の手足となって、ドアを開けたり電機を点けたり、障害に応じて活躍。聴導犬は、チャイムや赤ちゃんの鳴き声など様々な音を聞き分け、耳の不自由な人に知らせます。

これら三種の犬は『補助犬』と呼ばれ、厚生労働省の『身体障害者補助犬法』に基づいた特別な訓練を受け、厳しい審査の後認定されます。補助犬は利口なペットや機械ではなく、自立や社会参加の手助けをしてくれる相棒です。公共施設や交通機関では同伴は勿論のこと、平成十五年十月一日からは、デパートやスーパー、ホテルや飲食店などの一般施設でも同伴が当然となりました。いつ、誰が、どんな障害とともに暮らすようになっても不思議のない人生。誰もがより住みやすい街への願いを込め、応援したいものですネ。

応援といっても、一体どんなことが出来るのでしょうか。にわか聞きかじりですが以下のことのようです。

1．補助犬を見かけたら、心優しく無視しましょう。犬たちは仕事中なのです。

2．障害者が困っているような気配を感じたら、気軽に声をかけてください。

3．法律を知らない飲食店などで同伴拒否されていたら、よき理解者として応援してください。

4．一頭育成に百万円以上かかります。使用済み切手や書き損じはがき等収集にご協力ください。

5．一人でも多くの方に知っていただきたく見学日を設けました。（無料／予約必要）毎月第３土曜日午後２時より（１時間）埼玉県ふじみ野市亀久保二二〇二

極ささやかな応援ですが、今すぐ私にだって出来そうなことは、使用済み切手や書き損じはがきの収集。もしご賛同下さる方がいらっしゃれば心強く大嬉し。ある程度集まれば、『筑波山がまの油売り口上研究会』として、是非お送りしたいものです。

筑波山ガマまつりを楽しむ

佐藤　貞弘

私の今年のガマまつりは、三年振りに筑波山神社周辺でのイベントを見て歩きました。

ガマまつりの神事は、十時より筑波山神社境内随神門西側の池の前で、市原市長、市議会議長ほか関係者の出席の下に執り行われました。もちろん、筑波山ガマの油売り口上第十八代名人及び第十九代名人永井兵助も列席、特に第十八代岡野名人はもうすぐ百歳を迎えるという高齢ながら元気な姿を見せてくれました。

今年は第六十回目という節目の年でもあり、挨拶では、つくばエクスプレスと関連づけた今後の筑波山観光のあり方を示唆するものが多かったかと思いますが、もっともっと商売が繁盛し、元気な筑波山になってほしいものです。

第十九代吉岡名人によるガマの油売り口上奉納は、光誉上人慰霊祭のあとに行われた。青色の着物に白袴、小気味よいテンポの口上に、皆暑さを忘れて引き込まれていく。益々元気な、年齢を感じさせない第十九代の口上に大拍手である。

見せ場は紙切り、「一枚が二枚」と切ったあとはテーブルに刀を置きそして紙を折り、「二枚が四枚」と切って・・「一束と二十八枚」まで早いテンポで紙を切ったように見せて繰り返した左手には、握った手から溢れんばかりの紙吹雪が見えている。「サッと散らせば・・」軽い半紙は扇子にあおられて気持ちよく飛び、舞い落ちる。比較的大きめのサイズだが、見栄えがよくこれくらいが良いようである。　この後、田中ばやし保存会のお囃子を聞いてから筑波山頂組の応援に行く。

もっと皆さんの口上を聞きたいところだが、今年はガマまつりの全体を見たいのでお先に山を下り、筑波山神社から門前通りで行われている各種のイベント、特に興味のある保存会メンバーによるガマ口上や大道芸研究会メンバーによるバナナの叩き売り、バイオリン演歌等の大道芸を見て・聞いて楽しんだところです。筑波山頂組の皆さん！暑い中本当にご苦労さまでした。

ウォーキングとがま口上

渡辺　由正

たいてい朝五時には、ウォーキングに出発する。田舎の朝ははやい。太陽はすでに昇っていて、すがすがしい気分である。雨でも降らなければ、ほとんど毎日の日課である。

はじめは、散歩にでも、という軽い気持ちで始めたことだったが、近頃は歩かないとなんとなく一日がはじまらない。習慣とは、かくなるものかと驚いている昨今である。

八十路の坂を登りはじめて、いくらかずつでも体を動かして適度な運動をし、健康であればと願っている。

いつも同じ時間に会う新聞配達さんと笑顔で会釈を交わしながら、朝の空気を胸いっぱいに吸い込む。所要時間は約一時間、歩数にして六千歩から七千歩、距離は三・五キロぐらいか。

そろそろ体がほぐれて、歩きにリズムが出てきたころ

「サー、サー、お立会い、ご用とお急ぎでない方はゆっくりと聞いておいで・・・」

朝練である。朝の静寂を破って口上は続く。急に口上を始めるものだから、犬が一斉に吠えてくる。構わず口上を続けていると、犬も高齢なのか永くは吠えていない。

はじめの頃は、家主が起きてくる事もあったが、すでにその頃にはこちらは、ずーっと先の方を歩いている。

道々、歩きながら考えるに、口上は重点的に練習したほうが効果的であると思われる。

前半は「がまを捕らえてきて油ができるまで」、明日は「がまの油の効能」、次の朝は「抜けば玉散る氷の刃」の語りに重点を置いて、というように口上を述べてみる。

口上は自分ひとりが語っているのではない。聞いている数多くの客がいる。客の心をつかんで「がまの油」を一つでも多く売りさばくことが最大の目標である。真剣勝負そのものである。

「立ち去ろう」としていたお客が「立ち止まって」一歩前へ出て拍手をしながら聞いてくれる。そんな口上ができたら・・・と常に願っているのである。

次のようなことを、いつも念頭において日々精進をしていきたい。

1. 第一声は歯切れよく語りかける。
2. どうしても早口になりがちなので、「間」を十分にとること。
3. 口上台の後ろばかりでなく前へ出て話すことも大事である。
4. 口上にメリハリと強弱をつける。
5. 口上は、動作と表情が豊かであること。
6. リズムにのってテンポよい口上に心がけること。
7. 自分なりの独創性とユーモアを盛り込むことも考えてみる。

兎にも角にも、口上の成功は練習と努力であることも肝に銘ずるべきである。

ユーモアたっぷり、つい引き込まれる渡辺氏の口上風景

編集後記

一雨欲しいと思っていたら、いわゆるゲリラ豪雨。程度というものがあろうと、天を仰ぎ地球の行く末を少し憂いてみた今夏。

九月二十日より口上講習会が始まります。興味をお持ち方にお声掛けください。

次号の原稿、二月を目途にお寄せください。楽しい話題をお待ちしています。

編集子